様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　元 年　 ５ 月 ２７ 日現在

機関番号：３２６２１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2014～2018
課題番号：２６３６０００２

研究課題名（和文）ポスト・イスラーム主義と政治：トルコの公正と発展党政権下民主化改革を事例として

研究課題名（英文）Post-Islamism and Turkish politics

研究代表者
澤江　史子（Sawae, Fumiko）

上智大学・総合グローバル学部・教授

研究者番号：７０４３６６６６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,800,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の実施期間である2014年から2018年にかけての5年間に、トルコ社会はここ数十年、経験したことのない規模と性質の大きな政治社会的事件に立て続け直面した。そうした現実の推移を反映して、本研究は、一旦、民主化に向かった政治社会が権威主義化や暴力に傾斜していくプロセスを、同政権期を超えてトルコの政治社会構造を規定してきた構造的要因の観点から分析し、国内社会と国際社会の価値規範の序列と社会階級構造の関連性について更なる解明が必要であることを明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義
トルコはムスリム多数派社会でありながら世俗主義のイデオロギーで国家と国民建設が進められ、イスラム的政治社会運動が民主的プロセスに参加しつつ政治経済的発展を遂げてきた。そのためグローバルな政治経済的パワーバランスがどのように変化していくかという点で鍵を握る重要な地域大国と目されている。そのようなトルコがイスラム的アイデンティティを強調する公正と発展党政権のもと、民主化と権威主義化の間で揺れ動いている様を、短期的な政治社会変動を押さえつつも、より長期的かつ構造的な背景に位置付けながら、非西洋世界の近代政治とグローバル化の相関を解き明かそうとした。

研究成果の概要（英文）：This research was conducted during 2014-2018, which period witnessed unprecedented turmoils in the politics and society in Turkey. Inspired by the development in the real world, the research focused on the analyses about how the Turkish political society under the Justice and Development Party governments, once praised with its democratizing records and a strong presence as a regional power in the Middle East, headed so quickly to authoritarianism and disorders. It explored the structural foundation in which the political paralyses were rooted, and found the importance of further research about how both domestic and international hierarchies of values and the social-class divides interrelatedly comprised the basis of the foundation.

研究分野：地域研究

キーワード：トルコ　公正と発展党　権威主義　イスラム　世俗主義

１．研究開始当初の背景

（１）研究計画時の状況

本研究を計画した 2013 年初秋と、研究が実施された 2014 年春以降現在までの期間はトルコ政治社会が大きく揺れ動き、調査研究の実施条件もそれに伴い根本的に変化したといえるほどの断絶が存在する。2013 年春以降、クルド問題はトルコ国内ではゲリラの国外撤退が開始され、その後どのように武装放棄と和平合意に至るのかの正念場として希望をもたらしていた。他方で、そうした民主化進展の雰囲気は、より言論や文化的自由への市民的欲求をより高めることになり、政権支持層の若者さえ多数参加したといわれる、史上空前の規模の組織動員によらない反政府デモがイスタンブルを中心にトルコ各地に広がった。これに対してトルコ政府は集会の禁止や機動部隊によるデモ参加者への取り締まりを行ってはいたものの、その後、現在のトルコ政治社会が到達している権威主義的レベルにまで急速に悪化していくとは、予想できないほど、まだ民主化過程の進展に希望が持てる時代だった。

そこで、当初計画では、2002 年以降、単独長期政権の下で実現された民主化改革を、ポスト・イスラーム主義という概念を手掛かりに分析する予定であった。2002 年以来、トルコはイスラーム的アイデンティティを重視する公正と発展党が単独政権を握っており、トルコの民主化改革は、ムスリム多数派社会における現代的民主主義と市民社会の発展のあり様を占う重要な事例として、政治学やイスラーム地域研究の分野で注目を集めていた。また欧米諸国でも移民社会の宗教性やそこから翻っての白人系欧米人中心に形成されてきた国家社会諸制度の隠れた宗教的側面が近年注目を集めるようになっており、イスラームという特定宗教に限らず、より広く、従来の近代化とともに世俗化・非宗教化が促進されるという世俗化テーゼを見直そうとする研究関心が、一部の政治学者、宗教学者、社会学者、人類学者の間で高まっていた。本研究は、トルコ政治研究という一国地域研究を超えて、こうしたより広い学術的研究動向にも啓発されて、トルコを事例としながら、他国や他地域との比較的視座に基づいた概念・理論的考察を志向する研究として構想された。

（２）研究開始時から研究プロジェクト期間全体にわたる状況

ところが 2013 年の年末ごろから与党内での派閥争いが司法プロセスをも巻き込んだパージと言論規制へと展開していった。しかも隣国シリアで「イスラーム国」（IS）が台頭し、トルコ国内でも 2015 年 1 月から 2 年間にわたり大規模な被害を生む自爆攻撃を繰り返した。また、IS はシリアではトルコ国境地域のクルド人多数派地域を支配下に置こうとしたことで、親族関係やクルド・ナショナリズム運動のネットワークで強く結びついていたトルコ側のクルド左派運動を刺激した。こうした情勢を背景として、クルド左派ゲリラは国外撤退を事実上放棄し、2015 年夏以降、むしろトルコのクルド人口多数派地域の主要都市ではトルコ警察や軍の立ち入れない「解放区」を武装活動によって実現しようとする作戦に転じ、トルコ国内各地でトルコ警察や軍を標的にした自爆攻撃を展開した。2017 年 7 月には多数の死傷者を出して実行未遂に終わったクーデタも発生した。

こうした国内外の諸要因は互いに関連しながらトルコの政治社会を急激に不安定化させていったが、本研究の当初の目的との関連で重要な変化として、公正と発展党政権は強いリーダーシップ発揮するエルドアン現大統領の采配の下、政権与党組織としてもトルコ政治社会としても強権的な指導者の専断によって権力分立や民主的権利や言論の自由を侵害し、政府批判を鮮明にする政治・市民活動家はもちろん、ジャーナリスト、学術研究者をも逮捕・投獄・パージし、権力死守を最優先にし始めたことがあげられる。さらに、治安情勢と権威主義化の両方が悪化し、情勢の不透明感が強まる中で、外国人研究者の現地における調査研究活動にも多大な注意が必要な事態となった。

こうして、当初は民主化改革という趨勢の中で、公正と発展党政権の主要改革を分析する予定であったが、トルコ政治社会研究者として、日々刻々と情勢が変化するなかで、まずは最新の情勢にまつわる情報を入手し、変化を的確に評価していくことが迫られた。また、当初研究目的についても、大枠の研究関心と意義については変更はないものの、具体的な研究の方向付けや焦点の定め方については、情勢の変化に応じて変更することにし、実際の研究は以下のような目的と方法に基づいて実施されることになった。

２．研究の目的

本研究の目的は、現地調査の実施可能性や現地情勢の変化に照らした研究の意義付けと妥当性の確保のために、当初予定から焦点を変更することになった。まず、ポスト・イスラーム主義という概念自体の検討については、トルコ政治社会の変動の成り行きに照らせば、この概念単独で考察を勧めるよりも、類似・関連概念と関連付けながら考察する意義に気が付き、ポスト世俗（主義）やポスト・ケマリズム、さらには宗教／世俗の相互排他的二項対立的概念化の見直しといった、近年の宗教学や人類学、社会学、政治学など、ディシプリン横断的に広がっている学術的模索について目配りしながら、トルコのイスラーム系政党をめぐる政治ダイナミズムや認識をめぐる構造的変化について、理論的探究と実証的な解明を目指した。

また、研究期間の 2 年目以降は、シリア内戦と連動しつつトルコ政治社会の不安定化が顕著になっていた。シリア内戦は、大国やトルコを含む周辺国の介入により国際化し複雑な利害関係が錯綜しており、そこではトルコ・シリア両国にまたがって活動する左翼クルド・ゲリラと

「イスラーム国」の戦闘が、宗教／世俗の二項対立的なフレーミングでの宣伝合戦と連動しながら展開していた。こうした状況に鑑みて、当初予定していた、公正と発展党の過去の民主化改革に焦点をあてる計画を変更し、実際には、同一政権の下で民主化改革の後に権威主義化が起きていることを踏まえ、それがどのような認識的フレーミングに依拠して起きているのかを、政権与党だけでなく、政権与党が埋め込まれているトルコ政治社会とさらにそれが埋め込まれている国際政治社会における、宗教／政治にかかわる国際的価値規範のヒエラルキー構造の観点から解き明かすことを目指した。

また、後半に差し掛かる 2016 年には現地治安情勢がすでにかなり悪化し、それに伴って政府の権威主義化が急速に強まり、2018 年にはついに議会制民主主義から大統領の恣意的政治を可能とする大統領制に移行した。そこで、研究期間後半は、こうした現実の権威主義化の流れについて、その背景状況や主要政治アクターの動きと相互関係などを、イデオロギーや政治運動面での志向や戦略の変化と結びつけながら明らかにし、時事解説的成果発表を通じて、研究成果の社会還元を行うことも目的の 1 つとした。

３．研究の方法

当初は主としてトルコ国内の民主化改革に視野を限定する予定だったが、現実の変化に鑑みて、国内の政治社会構造とアクター間のパワーバランスの変化を、トルコを取り巻く中東地域内パワーバランスやグローバル大国間のパワーバランスとも関連付けながら見る必要が明らかとなった。そしてその際には、いわゆる政治力や軍事力の意味合いでのパワーだけでなく、それと密接なかかわりを持つ、人々の現実認識を左右するパワーの側に注目することが、非西洋世界において、とりわけイスラームを掲げる政治社会運動をめぐる国内・国際政治の動向を読み解くことが、現実政治の理解だけでなく、概念や理論的な探求においても、重要であると思われた。具体的には、国内と国際のリンケージにおいて鍵を握る左翼クルド・ナショナリズム運動と「イスラーム国」の戦闘は、そうした認識とそれを受けての世論や外交政策を大きく影響するイデオロギー的側面の重要性を際立たせたが、本研究はそれがトルコ政権与党に関する国内外の認識（性格付け）とも連動していく過程に焦点をあてる方法をとることにした。この方法論的変更により、より社会学的な理論的探究を予定していたが、国際政治学における認識論的研究も射程に入れた文献調査を行った。

また、大前提として、日々刻刻と変化する政治社会状況に関する情報収集を行う必要があり、トルコの新聞・テレビ等のメディア情報の収集と、政治家や市民活動家などへのインタビューを中心とした現地調査を大なった。現地調査および研究発表に関しては、慎重と調査対象者の安全に関わる倫理的配慮も考慮しながら毎年度の計画を策定・実施することとなった。そうした現地情勢を背景として、当初予定していた現地調査を一部見合わせたり、研究期間の 1 年繰り延べという対応を取った。

４．研究成果

（１）ポスト・イスラーム主義や類似・関連概念をめぐる理論的研究の成果

前半の 2 年は比較的、当初の予定通り、ポスト・イスラーム主義という概念の先行研究のレビューを行いつつ、その定義や類似・関連概念との関係性について同定していく作業を行いつつ、公正と発展党政権下でのトルコの諸改革を評価する際に、その概念がどのようなポテンシャルと限界を有しているのかについて考察した。その結果、ポスト・イスラーム主義は単純にイスラーム系政党の自由権利擁護志向の前進・後退の問題としてではなく、グローバルな政治経済環境や国内の現実政治の諸条件の中でその志向の範囲が拡大や縮小をするという、全体のなかに位置づけた分析を研究期間後半に向けて進めていく必要性が認識された。その意味で、世俗派の主要野党の間でも、イスラームにより開かれた主張やイメージづくりが始まっていることに鑑みれば、ポスト・イスラーム主義的傾向の定着や成熟は、他方で「ポスト世俗（主義）」との相関において進行するのではないかとの着想が得られた。この議論は研究会発表・講演会等の②、③として発表された。また、「主な発表論文等」の欄に記載の雑誌論文④「ポスト世俗主義とポスト・イスラーム主義の時代のトルコ」は、ポスト世俗（主義）とポスト・イスラーム主義に関する近年の研究動向を踏まえたうえで、トルコの政治史に焦点をあててその相補的展開を概観しながら考察したものである。図書④所収論文“Post-Islamic Advocacy on Gender in Turkey: The Capital City Women’s Platform”は、特にイスラームと政治の分野で注目されることの多い女性やジェンダーについて、トルコのイスラーム女性運動の事例研究として、ポスト・イスラーム主義という概念の可能性を論じた。

（２）トルコ政治社会の現実の推移を国内社会と国際社会の言説・認識枠組みのリンケージから分析する研究の成果

後半の 3 年間は、現政権政党に連なるイスラーム系政党の政治目的を国際政治やトルコ国内政治の規範的ヒエラルキー構造に位置付ける大局的な論考を執筆することに重点を置いた。その成果として、イスラーム系政党のみならず、ムスリム多数派社会と認識されるトルコが西洋中心の近現代国際政治においてどのような位置づけにおかれ続けており、それが現政権のシリア内戦と関連したクルド政策にどのように影響を与えているのかについて、図書③所収論文「未完の東方問題」と、研究会発表・講演会①として発表した。また、そうした近現代国際政治の

価値のヒエラルキー構造に大きく規定されたトルコ国内の世俗主義的な価値規範ヒエラルキーが、現政権による民主化改革とその後の権威主義化の波を得て、未だに国際規範と連動してトルコ国内の世俗‐イスラームの対立を喚起し続けていることを、雑誌論文②"The Condition of the Post-Kemalist Public Sphere in Turkey"として発表した。

他方で、イスラーム・アイデンティティを強調する政権下で緊張が続く状況にもかかわらず、イスラームの日常的実践はむしろ世俗化ともとれる様相を呈するようになっていること、それにもかかわらず国際社会や国内世俗派からは権威主義化する政権によるイスラーム化強化という受け止めが強まっている矛盾について、宗教（イスラーム）／世俗という概念を再考する必要を図書②所収論文「疑似コロニアルな宗教概念に抗するスカーフ」で発表した。

（３）急変するトルコ政治社会情勢に関わる社会還元的成果発表

第３の研究目的である、時事解説については、短期的な事象変化の説明にとどめることなく、より長期的視野に立ち、構造的な背景と関連付けながら説明することで、短期的な消費用の情報ではなく、後年の読者の関心にも応えうる知識の提供を目指した。雑誌論文③「エルドアン政権「強権化」の構図」は、エルドアン政権の権威主義化の主要原因の一つでもある政権与党内の政争がどのようなメカニズムで生じているのかを、党内派閥の政治社会的支持基盤の観点から考察し、イスラーム系有権者の間の宗教組織や民族アイデンティティに基づく亀裂がもたらすダイナミズムを説明した。また、図書①所収論文「トルコの「クルド系政党」」は、左翼クルド・ゲリラとトルコ国軍の対立激化に伴って政府の系列合法政党への弾圧が悪化している最近の情勢をより長い歴史的背景やクルド内のイデオロギー的多様性と関連付けて説明した。

また、インターネット上のデータベースサイト（その他の①）において、トルコの政治変動を国家体制や選挙制度、実際の各選挙や諸政党の活動の諸側面を解説した。雑誌論文①「2019 年 3 月 31 日統一地方選挙に向かうトルコ」は、そのようなデータベース構築の一環として、権威主義化を強める現政権の行方を占う政治イベントとしての 2019 年統一地方選について、それが本研究が焦点とするトルコの政治社会構造の変動をどのように体現しているのかを解説したものである。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計　4 件）

① 澤江史子「2019 年 3 月 31 日統一地方選挙に向かうトルコ」『中東協力センターニュース』No.3、2019 年、10-17 頁。（招待）
https://www.jccme.or.jp/11/pdf/2019-03/josei02.pdf

② SAWAE, Fumiko, "The Condition of the Post-Kemalist Public Sphere in Turkey," *Sophia Journal of Asian, African, and Middle Eastern Studies*, No. 35, 2017, pp. 181-201. （査読有）

③ 澤江史子「エルドアン政権「強権化」の構図」『外交』No. 39、2016 年、72-79 頁（招待）。

④ 澤江史子「ポスト世俗主義とポスト・イスラーム主義の時代のトルコ」『現代宗教 2016』2016 年、35-53 頁。（招待）
http://www.iisr.jp/journal/journal2016/

〔図書〕（計　4 件）

① 澤江史子「トルコの「クルド系政党」」山口昭彦編『クルド人を知るための 55 章』明石書店、2019 年、202-206 頁。

② 澤江史子「疑似コロニアルな宗教概念に抗するスカーフ」池澤優編『政治化する宗教、宗教化する政治』岩波書店、2018 年、149-164 頁。

③ 澤江史子「未完の東方問題」納家正嗣・永野隆行編『帝国の遺産と現代国際関係』勁草書房、2017 年、57-79 頁。

④ SAWAE, Fumiko, "Post-Islamic Advocacy on Gender in Turkey: The Capital City Women's Platform," in S. Nejima ed., *NGOs in the Muslim World*, Routledge, 2015, pp. 87-101.

〔その他〕

ホームページ等

① 澤江史子「トルコ」（人間文化研究機構（NIHU）「現代中東地域研究」東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所（AA 研）拠点「中東・イスラーム諸国　政治変動データベース」、2019 年 1 月公開）
https://dbmedm06.aa-ken.jp/archives/73

研究会発表・講演会等

① 澤江史子「現代の国際関係と帝国の遺産」　上智大学国際関係研究所講演会「オスマン帝国の解体と現代世界」、2017 年 12 月 19 日。（招待）

② 澤江史子「トルコ大統領選にみるトルコ政治のゆらぎ」、人間文化研究機構（NIHU）「イスラーム地域研究」東京大学拠点「中東・イスラーム諸国の民主化」研究会、2015 年 3

月 3 日 。

③ 澤江 史子「ポスト・イスラム主義」からトルコ政治を考える　東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所「中東☆イスラーム教育セミナー」、2014 年 9 月 20 日。（招待）

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。